

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十九年十二月十五日 発行 (毎月一回・十五日発行)

(通第四二五号)

慈

光

第三十六卷

第十二号

次

目

懺悔録の結論……………	近角常観……………	(1)
ただ念仏して——たのもしさ……………	池山榮吉……………	(4)
照しぬかれて……………	井上善右エ門……………	(7)
慈光日誌抄……………	西元宗助……………	(9)
聞思録抄……………	誉田豊吉……………	(12)
無相法語……………	岩崎成章……………	(15)
池山先生を憶う……………	花田正夫……………	(20)

懺悔録の結論

近 角 常 観

最後にいたって、特に諸君の注意をうながすべき事がある。そも／＼以上叙述し来りたる、アジャセ王が無根の信を生ずるにいたりたる涅槃經の所説は、いかにも生ける懺悔の標本とも云いつべきものである。而して何人が此の如き文字に着眼したかを注意せねばならぬ。此文字は、親鸞聖人が、自己の信仰を以て真宗と名づけ、其根本の書として選述された『教行信証』六卷の内、殊に其中心とも称すべき『信』の巻の最後に於て、永々と引用されたる次第である。先ず初めに、聖人自己の胸中を披瀝して、熱誠なる懺悔をささげて曰く。

誠に知ぬ、悲しいかな愚禿の鷲。愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまず、慚づべく傷むべきものかな。

と。かく簡潔なる文字に、奥深き意義のこもりたる文字を冠らせて、直に引用したまいたるが、即この涅槃經の文

字である。私はひそかに考うるに、如何にもこの語氣が、アジャセ王の懺悔を以て、聖人自身の懺悔に代えられたるが如く、感ぜざるを得ぬのである。全体西洋などに於ては懺悔とか告白とか称して、自己の信仰経歴を写し出すことがあるが、仏教に於てはこの種のものは無いと考えて居たが、実に親鸞聖人の為され方は、此の如く不言の間に、自己心中を披瀝されたものらしい。此の如く実験の事実に依らずんば、また救済の利益は顕われぬ。病ありて初めて薬の力を顕わすが如し。故にこの涅槃經の文字を引用しおわりて、其結文に曰く。

ここを以て今大聖の真説に拠るに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓をたのみ利他の信海に帰せよ。これを矜哀し、これを憐愍したまふ。喩へば醍醐の妙薬の一切の病を療するが如し、濁世の庶類、穢惡の群生は、金剛不壞の眞信を求念すべく、本願醍醐の妙薬を執持すべきなり。応に知るべし。

実にこれ実験の信仰を顕わされたる、生ける如き文字である。本願醍醐の妙薬とは、如何にも適切なる言葉である。そも／＼醍醐なる語は、涅槃經における五味の譬喩より出で居る。五味の譬と云うは、

牛より乳を出だす、乳より酪を出だす、酪より生蘇を出だす、生蘇より熟蘇を出だす。熟蘇より醍醐を出だす。醍醐最上なり。若し服する者は、衆病みな除くる、所有もろもろの薬は、悉く其中に入るが如し。善男子、仏も亦かくの如し。仏より十二部經を出だす、十二部經より修多羅を出だす、修多羅より方等經を出だす、方等經より般若波羅蜜を出だす、般若波羅蜜より大涅槃を出だす。なほし醍醐の如し。醍醐といふは、仏性にたとふ。仏性は即ちこれ如来なり。善男子、かくのごときの義のゆえに、説きて如来所有の功德、無量無辺、不可称計とのたまへり。

といえる経説である。古来天台家等に於ては、これを五時八教の教判などにあてはめて解釈するけれども、これはそのように理屈的に解釈しては味がない。明らかに譬にあらわせる如く、仏の直接に説法したまいた御説話は、牛の乳のようなものである。其十二部經より、後代の文字にあらわれたる契經を生じたのである。これ恰も乳をかためて酪とした如きである。しかるに其契經を味いて、諸仏浄土の広大なる靈界を描き出だしたるは、恰も酪を煮て生蘇を

造りだしたようなものである。

而して其靈界の中より、般若の眞智を練り出したるは、恰も生蘇を煮込んで熟蘇を生じたようなものである。しかるにその絶対の眞智を結晶せしめて、涅槃寂靜の歡喜愛樂の境界の味を与えて下さるのは、恰も熟蘇を遂に精製完成して、醍醐の妙味を造り出だしたるが如くであるという譬喩である。此の如く実に一代仏教の精髓が、結晶され、凝結して、涅槃寂靜歡喜愛樂の醍醐を生じたという、至極実験の味をあらわしたる喩である。而して聖人の見地よりして見れば、涅槃經に説かれている、涅槃寂靜歡喜愛樂の醍醐の妙薬は、即ちこれアジャセがまのあたり味いたる金剛不壞の眞信、弥陀の本願の慈愛の塊りなりという御考である。此の如く思い切った断言は、これを実験したる聖人でなくしては到底あたわぬことと、讃仰する外はない。

此の如く叙述し来れば、觀經におけるイダイケ夫人の得忍、涅槃經におけるアジャセ王の獲信は、実に実験の信仰の濫觴である。而も煩悶を極めたる女性、逆惡を極めたる罪人の救済を得る起源である。故に実験の見地に立てる親鸞聖人は、この事実を以て実に深き意味あるものと為し、仏法の大なる願力も、此王舎城の悲劇ありて、初めて其救済力を実現し来りたるものと感歎せらるる。而して王舎城に於ける悲劇は、即ち人生に於ける悲劇にして、いやしく

も人間のあらん限り、必ず常に反覆さるべき事実である。たとい吾人は、歴史的に之を実現せずといえども、内心の実験としては、念々刻々、常にかくの如き悲劇を、人生の上に演じつつある次第である。この如きの人生、この如きの吾人が、無根の信を生じて大安心を得らるる所以は、実に仏在世に於ける王舎城の悲劇によりて示されたものである。故に聖人の眼中に映ずる王舎城の悲劇は、唯一事の渺たる歴史上の一事実に非ずして、心靈上の一大事実である。故に聖人は『教行信証』の総序に於て、先ず喝破して、「ひそかにおもひれば難思の弘誓は、難度海を度する大船、無碍の光明は、無明の闇を破するの慧日なり」と劈頭に弘誓の大船、無碍の慧日を掲げ、直に其船に乗じ、其日を仰ぎたる事実をあげるために「然れば即ち淨邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機あらはれて、釈迦、イダイをして安養をねがはしめたまへり。これ即ち権化の仁、ひとしく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、あまねく逆誘闡提を恵まんと欲してなり」と云われたのを見れば、聖人が如何にこの実験的事実に重きをおかれたかを知るべきである。この如く此事実を重く見るときは、此事実の下に、深き意義の横たわりてあることを感ぜずには居られぬ。即ち聖人は、此事実に関係して居る善人も悪人も、男性も女性も、大王も太子も、臣下も乃至守門者に至るまでも、

皆大聖仏陀の権化にして、吾人罪惡深重、煩惱熾盛の衆生を、救済せんがために、人生の上に演ぜられた一大活劇であると、信ぜざるを得ぬのである。而してこの奥深き聖人の觀察は、亦吾人が現世に對する深遠なる人生觀を生じ来る所以である。吾人つら／＼人生をかんがみるに、其行路崎嶇として屈曲復雜を極むるといへども、終には万峰過ぎ来りて茫茫たる平地に達し、流水滔々として右に折れ左に繞り、迂回を極めるも、終には洋々たる大海に注ぐ如く、人生は畢竟、或は煩惱、或は罪惡、幾多の実験を経て、最後に尽十方無碍の光明海中に歸入せしむる活劇でないものはない。此等の深奥なる我が人生上の実験をば「人生問題」の名のもとに披瀝する考である。吾人はこの篇の結末として聖人が、この王舎城の悲劇を詠じたまいし和讃を拝読して、意味深長なるを味い奉る次第である。曰く、

弥陀釈迦方便して

阿難、目蓮、富樓那、韋提

達多、闍王、頻婆沙羅

耆婆、月光、行雨 等

大聖おの／＼もろともに

凡愚底下の罪人を

逆惡もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり

ただ念仏して―たのもしき (四)

池 山 榮 吉

念仏を聞きそめてから、惜しみなく奪い終るまで、意識に上るにせよ上らぬにせよ、それからそれと常不斷の過程を辿つてやまない幾多の生成推移は、箇々の事象からみれば、或は桐葉、或はいとし子の死、さては空中の声、縁の下の聴聞など、千差万別、それ／＼の機縁に由来するが、その原動の源にさかのばれば、一に力のもよおしにかかる、と、首肯かされる理由がある。

他力の働く模様に就いて、最近私の眼底に映じた光景があります。それを一つ次に紹介してみましよう。

他力の働きかける世界を、一つの球と見る。各位さんも先ず地球儀みたような球を想像してみて下さい。私達から見える部分、球の前半分、仮に前半球と命名する。前半球は現在に面している。だから見えるのであるが、球の後半分、後半分は未来に面している。だから私達の視界にはいつて来ない。月の背面が見えないと同じように。

今、私達の目に見える現在面を熟視すると、中央部に、白く光る一つの圈がある。仮りに本丸と名けて置く。本丸から一つの濠を距てて、更に一つの環が見える。色は淡灰色、二の丸と名ける。又更に一つの濠を距てて環状圈が見える。その色は濃灰色、三の丸である。三の丸の外周に、また一つの大きな濠があつて、その外側は見渡すかぎり一面に、黒暗々の一色に塗りつぶされている。

なお一つ見逃せない現象は、全体の色調が中央部に近づけば近づくほど、明るさを増して、同じ黒や灰色にしても、だんだん濃度が薄れて行く傾向があるという点である。

各位には、もうおうかた、この喩譬の意に勘附かれたことと思う。球全体は、他力の働きかける限り、三千世界を打つて一丸としたもの。

中央の白圈、本丸は白道である。本願一実の大道である。淡濃灰色の二の丸、三の丸は、万善諸行、自力作善の小路

である。本文に述べたところに従えば、二の丸、三の丸が、転化の其の一、其の二に、本丸がその三に該当する。而して外濠を囲む外面一帯は、念仏も聞こえず、よし聞こえても、まだ称えるほどに致っていない、無人空曠のはるかなところである。

この見取図をそっくりそのまま裏返して、未来面の半球へあてがったら、どんな景觀を呈するかというと、中心の本丸は、極楽無為の涅槃の報土に変わる。その色調は、まあ燦爛たる金色としておきましようか。それとも白金の方が好きだとあれば、そうしておいてもよろしいです。二の丸、三の丸は、辺地僻慢、疑城胎宮の化土と化する。色は銀乃至燐し銀どころ。外側一帯のみは、このまま原状を続けるであろう。その原状とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、黒暗の三途であり、輪廻の六道である。色は依然として黒。

然しなお子細に点検すると、前半球——後半球も同断と見なすべき理由があるから、両半球と云つてもよい——の状態は、中央部を除いては、ありのまま静止しているのではなく、常不斷に移動しつつあるのである。後半球の中央部、西方寂靜無為の楽は、常住にして変易あることなきを

を聞いてくれない。他の方面に向つては相当強いが、独り向中運動はどんなに奮発しても知れたもので、噴水がどんなに勢よく吹き出しても、或る程度まで行くと、急に衰退して了るのと同じである。

この空虚を満たして、中央帰趨の不可能を可能化するのには、他力の働きを待つばかりはない。否、このためにこそ現われたのが他力である。云々。

如来の作願をたずねれば

苦悩の有情をすですして

廻向を首としたまひて

大悲心をば成就せり

縦令一生造惡の

衆生引接のためにとて

称我名字と願じつつ

若不生者と誓ひたり

“他力”というのは、如来の本願力なり”

白道への牽引、ここは本願力廻向の独壇場である。中央に帰趨せしめる向中運動は、すべて廻向に因る生成推易である。

以てその本質とする。我能護汝の約束に、不退の位を確保される前半球の中央部、白道もまた然りと云い得る。但しここで変らないというのは、位置が変らないことを指すので、凡て活動が静止するという意味ではない。活動はますます盛んになりこそすれ、衰えるの、鈍るのということのあらう筈はない。一は他力の大本営、一はその御膝元、撰取の光明照護の丸の内であるのだもの。

中央部以外の部分は、大体に於て動きつつある。しかもその動きに一定の方向があつて、概して端から中へへと押して行く。局部的にはそれと反対、若くは別異の遠心的方向を取るものもあるが、それは一時的現象にとどまり、求心的大移動が、なべての傾向である。

動くとは何が動くのであるか。地球が動くように全体が動くのではない。地塊運動とか地滑りとかいった風に、局部が動くのではない。動くのは場所そのものではなくて、そこに棲む有情である。苦悩の有情である。而して動かすのは他力である。

固より有情そのものも動く、謂わば自轉的に動く。併し彼等の運動は、循環的、復帰的で、永劫復帰、輪廻転生は彼等の必然の定めである。彼等とても、中央帰趨も念願しないのではないが、如何にせん彼等が持つ性能が云うこと

池山先生 著書 御紹介

ありそなこと——南無阿弥陀仏

目次

序文 榊原徳草

一、父と子

二、狂乱して所為多きがごとし

三、聖人に親炙して 四、念仏の余韻——たのもしき

五、ありそないと (Es ist sehr möglich)

発行所 東京都国立市富士見台一丁目七番地

一五—四〇三

樹心社

定価 七五〇円、送料二五〇円、

池山先生の四十七回忌にあたり、京都の榊原徳草師の御骨折りによつて、五十九年十月に先生の御著書が出版されました。有縁の方々にお勧めいたします。かつて発行されていた「聖鸞」誌に上載されていて、まだ著書に出ていないものばかりです。

また御縁の深い樹心社の亀岡邦夫さんの御懇念によつて立派に出来ました。あちらにもこちらにも合掌しております。

(花田記)

照しぬかれて

井 上 善右工門

われわれ人間というものは、平穩で安易な生活をしているときは、自分の胸の底が本当にわからぬものであります。人の上を見て、自分ならそんな悪い心は起きないと思い、怨み悩む人を見ては、もつとさりと流せばよいものを感じ、不幸に泣く人には無常のことわりを忘れていたからであるようにも思います。人間は自分がその身になってみないとわからぬことが、どれほど多くあるか分りません。

そう思うと仕合せであるということは結構なようですが、それはまた同時に自分を遂に知らぬがままに過ぎてしまふ不幸な出来事であるとも言えます。自分を知る自分の正体に気づくことなしに、本当の真実に値うことは出来ないからです。画かれた影のような自己に住して自己を評価し、自己の主張を繰返して一生を終るということは何としてもまことの仕合せとは言いません。

人間は一人前の人間になろうとする青年の頃に達すると、誰の胸にも、一体この自分とは何だろう、何のために生き

ているのかという疑問が必ず湧くものです。これは人間にとって極めて大切な出来事と言わねばなりません。その大切な出来事も真に培い育てる事なく過ぎてしまうという事は、恵まれた宝を捨て去るようなものでありましょう。自己を問う声がおこるということは、自己が真の自己に呼びさまされていることであり、生に疑問をもつということは、生が生自体の意味を問うていることであります。ソクラテスがデルホイの神殿に掲げられていた「汝自身を知れ」という言葉に感動して、その言葉を青年を導き育てる生涯のモットーとしたということは、この点から顧りみて私は大変意義深い事だと思ふのです。釈尊も「汝自身を尋ね求めよ」と若者達に訴えられた物語りが仏典に出ています。

才市さんの詩に「ありがたいなあ、照しぬかれて、照しとられて、ナムアミダブツ」という一首がありますが、念仏がこの私に徹して下さる様子が才市さんの体験を通じて鮮かに語られていま尊さを感じます。「照しぬかれて」と

は、この私の知らなかった私の正体が真実のみ光に遇って照し出されることであります。しかしわが心でも底の底まで見ることは出来ない、底知れぬ闇こそ私の正体であります。「照しとられて」とは、その照し出されたありのままなる私が、そのままに照しとられて、摂取されてゆく姿であります。幻想的な不実な自己の殻が破られて、ありのままなる自己が照し出された時、まさにそのありのままなる私の全体が摂取不捨の光明に浴するのです。実ならぬ偽りの衣を着ているかぎり真実の光に触れることは出来ませぬ。その偽装の衣を脱がせて下さって、否な偽りの衣を貫ぬき通してこの生の肌に摂取のみ光を賜わるのです。才市さんが「ありがたいなあ……」と感激の声を発ち、言葉尽きて「……ナムアミダブツ」と結んでいる詩の始終に、阿弥陀仏の光に遇ういのちの躍動がさながらに詠いあげられているではありませんか。聖人が尊号真像銘文に「唯除五逆誹謗正法」の文を釈されて、五逆と誹法の「二つの罪の重きことを示して十方一切の衆生皆漏れず往生すべしと知らせんとなり」と申されているところにも、同じみ心を偲ぶ思いがするのです。

ある一婦人が夜更けて長い電話を下さいました。悲痛な声でありました。しかもそこに尊い響きが鳴咽と共に伝わって来たのです。それは家庭の私事に関するものでありま

すから、その仔細を申述べることは差控えざるをえません。しかし人間は、誤解され無視され、暴言と皮肉の仕打を受けたとき、どんな心がするでありましょう。その婦人は居ても立つてもおられず、苦悶のやり場がないので電話されたことが解りました。そして言われるのです。「はらわたが煮え返るようなのです……こんな憎悪の心を起すべきでない。自分がとやかくさし出る立場でないことはよく解っています。しかし掻きむしられるようなこの胸が、どうともしてみようがないのです。やめようと思っても湧き起つて来るのです……しかしこの私はこのような事に出会って始めて自分の心の奥に何があるかを知りました。自分という人間の正体がわかりました。もしこうした事がなかったら、自分は遂に自分を知らずに過ぎたでありましょう。それを思うと、悲しさと有難さに……」

王舎城における韋提希夫人が璣瑠を絶ち切つて釈尊の御前に拳体投地して号泣し、求哀懺悔された姿が彷彿として偲ばれるのであります。かかる時に法にあうことなければどうなりましょう。瞋恚と憎悪は炎となつて自他を焼き亡す外はありません。もしまたその瞋恚と憎悪を自から消除して後に救われるというならば、この私は一体どうすればよいのでしょうか。大悲摂取の念仏に遭う身の尊さが身に沁むのであります。

慈光日誌抄

——「よしあし」の御和讃の讃仰——

西元宗助

わが家の裏庭の萩が、ことしもあでやかにしんみりと咲いてくれて、そして散っていく。一日一日が消え、一日一日が生れてくる。いよいよ老境になったせい、日々、この世を去るわが身のことを思う。若き日、「死を忘れること勿れ」というギリシヤの哲人の言葉に感心したことであったが、今は忘れるどころではない。目前のこととし、いわば生死の分水嶺上にあって、毎日毎日が名残り惜しい。そして案外に明るい。それはお蔭で、光明土が与えられているからであろう。

いや、そうは言っても、いざとなれば、泣きわめくかも知れない、いや、臆して、死ぬのはイヤじゃと、じたばたと動揺するかも知れない。しかし、たとえ、どのように醜態を演じようと、「たのまるるただ念仏のわれにあり」(池山榮吉先生)であることが有難い。

○ 『正像末和讃』の終の、「自然法爾」の末尾の、よしあしの文字をもしらぬひとはみなまことのこころなりけるを
善悪の字しりがほは
おほそらごとのかたちなり

是非知らず邪正もわかぬ
この身なり
小慈小悲もなけれども
名利に人師をこのむなり

このご和讃は、聖人最後の八十八歳のころの御作であることは間違いないが、このご和讃を先覚の方々は、どのよ

うにご講釈くださったのであろうか。念のために、真宗全書(正統計・七四四) 真宗叢書(一三卷・本派のみ) 真宗大系(三六卷大派のみ) に収載されている学匠の方々の『正像末和讃』の御講釈に目を通してみると、多くの方々は「自然法爾」で終であって、かつて木村無相師の指適されたように、「よしあしの文字」和讃は省略されている。そのことは大正以降も同様であって、むしろ取り上げて重要視していられる方々のほうが希有である。

それでは徳川時代では、どんなかというと、かの香樹院徳龍(一七七二—一八五八)と如説院慧劔の両師で、共に香月院深励の門下。徳龍師のは真宗全書(第四三卷)に、慧劔師のは真宗大系にある。

大正時代以降となると、管見するところ、臼杵祖山師の「自然法爾」と暁烏敏師の「自然法爾の講義」(暁烏全集第七卷)であるが、以下これらの諸師の教示せられるところの大意を紹介し、親鸞聖人晩年の深甚なるご境涯をいささかでも讃嘆したい。

まず徳龍師は、三帖和讃の初の『浄土和讃』の巻頭の、「弥陀の名号となへつつ、信心まことにうるひとは」の和讃二首に相応して、三帖和讃全体の結びとして、この「よしあし」の和讃のあることを指摘して、そのもつ意味の重大性を述べていられる。暁烏敏師は、三帖和讃、「自然法

爾章」の結論はこの和讃にあると思われる。いや、この御和讃を書くための「自然法爾章」であるようにも思われますと、前置して講話に入っていられる。

さて、「よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのこころなりけるを」について、慧劔師が、まず『末灯鈔』の中の親鸞聖人のご消息文(八十八歳のとき)から、「故法然聖人は、浄土宗の人は愚者になりて往生す、と候ひし」と確に承り候ひし上に、物も覚えぬあさましき人々の参りたるを御覧じては、往生必定すべしとて、笑ませたまひしと、見まいらせ候ひき」のお言葉を引用していることは、注目すべきである。

すなわち、「よしあしの文字をもしらぬひとは、名もなき無幸の庶民―法然上人仰せの「物も覚えぬあさましき人々」のことで、このような人々こそが、「まことのこころ」であって、自然である(祖山師)と讃えて、聖人は本師法然上人を憶念せられた。そしてわが身の生涯を省みて「善悪の字しりがほは おほそらごとのかたち」と。「そらごと」とは、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと皆もてそらごと・たわごと・まことあることなき」の「そらごと」(虚言)であって、暁烏師は、「善悪の字知り顔は、この自分だと深く懺悔しておいになる」沈痛な御和讃であり、ここに仏智不思議なる「自然法爾」

のご境涯がうかがわれると。(五九四頁から五九五頁)

なお、右の御和讃は、「是非しらず邪正もわかぬこの身なり 小慈小悲もなければも名利に人師をこのむなり」の聖人最後の御述懐のお言葉をもって結ばれている。この「名利に人師を好むなり」のお言葉は、まことに痛切である。決して「衆生利益のため」などとは仰せになっていない。

ただ「名利に人師を好むなり」である。そしてかく自照せられるところ、おのずから往相廻向に即する還相廻向の御徳が活々として、今現に光被し、そのお蔭をこうむらせていただいている身であることを、殊に報恩講の季節にあたって、切に想うことであります。

かえりみれば、去る一月六日、わが木村無相翁はお浄土に還られました。そして、それをご縁として、聖人の「よしあし」の最後のご和讃と、聖人の御信心の核心をなす、「二種深信」のことを、この一年、あれこれと思惟され、深く深くご示教にあずかりました。そして親鸞聖人のご境涯の深奥にして涯底なきことを、あらためて知らされたことであります。

なお、このたび暁鳥敏師著「御和讃講話」上下二巻が刊行されるという、紹介させていただきます。(申込先・石川県松任市北安田町明達寺内涼風学舎・定価一万二千円程度)

実は暁鳥先生とのご縁はまことに深い。わたしがこの世

聞思録抄

人為と自然

——有意と無意、仮と真——

甲の商人は非常に丁寧に客を待つ、而も客却って気味あしくして来らず。乙の商人は至って質撲無口なれども、客常に来りて繁昌す。甲の教員は非常に生徒を愛すれども、而るに生徒懐かず。乙の教員は往々癪癪を起して生徒を叱れども、生徒却って慕う。甲の僧侶は弁舌爽かに壇上にて信者を泣かすけれども、信者敬服せず。乙の僧侶は咄弁にして無愛想なれども、信者敬服す。是れ何故ぞ。甲は人為的、乙は自然的無意的にして真実なればなり。造花は如何に美麗なるも蝶来らず。自然の花は如何に醜きも蝶来りて蜜を吸うが如し。

魔軍

魔軍無数にして我は常にそのとりことなる。魔軍の主なものを挙げれば、飲食魔、この魔の勢強くして間食過食に陥りやすし。睡眠魔、この魔のために早起出来ず居眠りを

において最初に仏法をうけたまわったのは、印度の仏蹟参拝から帰られたばかりの先生からであって、それはわたしの鹿児島旧制高校(七高)の学生時代——昭和二年の秋で、先生からうけた印象と感銘は強烈であった。

先生は、鹿児島とのご縁深く、その晩年まで殆んど毎年一度は鹿児島に來られたのであるが、その折のお宿は、わたしの伯母の藤武チカの宅であった。その因縁もあって私は先生から格別に可愛がられた。しかし、わたしは先生にはそのご生涯、そむきどおしであった。あたかも提婆のごとく。しかし先生は、その私を深く信頼されていた。わたしも亦深いご教化をいただいた。そしてその御縁もあって、この秋、暁鳥先生のご曾孫にあたる暁鳥照夫君の結婚のお仲人を、松任市北安田の明達寺御本堂においてさせていただきました。まことに感慨の深い、お芽出たいことであります。ペンをおくにあたりまして、ひし／＼と思ひ感じること。聖人が「善惡の字しり顔」と仰せくだされたのは、わたしのような、このようなもののためであったかという思いでございます。ただ南無阿弥陀仏

誉田豊吉

なす。安逸魔、この魔のために懶惰に流れ飯食を貪る。名利魔、この魔のために我慢を生じ貪欲を起す。

かかる魔軍を退治するには一に仏の御力による。仏光の輝く處、惡魔逃遁す。

如何にして仏の御声を聞くべきか

われは仏の實在を知りて後に非ざれば仏の声を信する能わずというが、世人の唱うる所なり。仏と御声、仏と御慈悲、仏と光明、仏と名号などと別々にあるにあらず。御声も御慈悲も、光明も名号も皆仏の御事なり。仏は我等凡夫の心の底に來り給うに種々の方便を以てし給う。或は経卷により、或は善知識により、或は信者によりて御慈悲を伝え給う。

「平生のとき善知識のことばのしたに帰命の一念を発得せばその時をもて娑婆の終り臨終と思ふべし」(執持鈔)

親鸞聖人は九十年間お慈悲を伝え給える仏の御使なり。聖人のみならず世々出世の善知識は皆仏の御化身なり。特に御縁深き善知識は仏の再来なれば之れを敬い之れを重んじその教化を頂くべし。わが心を種々に造りなして仏の声を聞くにあらず。善知識の御言葉そのまゝハ、イと承るばかりなり、善知識の御言葉は仏の御慈悲なれば、かかるものをかくまでの慈しみかとの一念の下に仏の御声を聞くなり。

入 信 の 機 縁

人々各異なれる業報によりて異なる苦悩を嘗む。仏はかく悩める衆生を一人一人の機縁に應じて救済し給う。親はその子の氣質に應じて一人一人異なる教育法を以て愛撫す。仏は種々の善巧方便を以て一人一人を別々に救い給う。仏の御方便は種々多様なれども、この者を助けずばおかぬとの慈悲は一つなり。大慈悲の御心より何とかして救いたしと千万無量の御方便を案出し給ひしなり。

されば、人がこんな工合にて入信したから自分もその真似をしたら入信すべしと思ひて、これを模倣するも決して信をうるものに非ず、人には甲の業報あり、己れに己れの業報あり。その業病に應じて施薬し給うが仏なり。故に宗教は自分一人の事なり、特種別の事なり。一般的の事に非ず。但し万人同一の信を得る所以は、かく入信の機縁は異なるも皆仏の大願力に催されて慈悲を頂く点に於ては同一なれば

に何物も認めぬ。

信者の心もまたこの通りである。自分の力で仏を信じているとは思わぬ。われは曾無一善の凡夫である。この凡夫が仏の御恵みでお助けいただき信心を得させて貰うているのである。とても御恩に報いることは出来ぬが、出来ぬながら、仏のお指図のまに／＼、種々の仕事をさせて頂くのである。自分には善をする力はない、人を導く資格はない。唯仏のお力われに入り込み給ひて、不思議なことをなさしめたもうことがある。自分は何処までも地獄一定の徒らものである。仏は何処までもこの仕方なき奴を憫み助け給ひ、此の奴をお使い下さるのである。要するに、真の孝子は自分は孝子とは思わない。真の信者は自分は信者とは思わぬのである。

信 仰 雑 観

信仰は現在の問題。信仰は未来往生の問題なり、現在のことに非ずという人あり、これあやまりなり。本来のことに苦にするは、現在の事実ならずや。

信仰は自己一人のこと。信仰は自己一人の為なり。他人に吹聴すべきものに非ず。

信仰は事実。お慈悲の有無は議論にあらず。お慈悲は善知識や同行や経巻を通じて事実として現われたもう。何よりもお慈悲。極楽よりも法悦よりも何よりも先ず第一にお

なり。かくわれ等は兄弟なり、同朋なり。賢愚、貧愚、職業相異なるも皆大御親の子なり、大恩師の生徒なり。

信 仰 の 生 活

信仰の生活は仏相手の生活である。人間相手の生活ではない。仏のお恵みを感じつつ生活するのが信者の生活である。

しかしこの人生を離れた別世界の生活ではない。この人生に來らせ給う仏の仰せに随順する生活である。寺院生活のみが信仰の生活に非ず。在家の生活も亦信仰の生活である。されば工場に於ても、学校に於ても、はた刑務所に於ても、仏の光明を仰ぐ時は、是れ即ち信仰の生活である。われは行住坐臥仏より護られ、仏より恵まれおるなり。仏と共に生活せるなり。南無阿弥陀仏

信 者 の 心

真の孝子は少しも自分の力を認めぬ。自分の力で孝行しているとは思わぬ。自分は不孝なものである。この不孝な奴を愛し給う親の御恩が実に有難い。この御恩を思えばジツとしておることは出来ぬ。何とかして報恩をしなければならぬ。されど御恩の万分の一をも報ずることは出来ぬ。実に慚愧の到りである。たとえいくらか報恩の行をした処が、それは自分の力でない。親の親切の身に徹したおかげである、畢竟、親の御力である。真の孝子は親の慈悲以外慈悲じや。慈悲を忘れて其の他を求むるは誤りなり。念仏の外は皆嘘。告白や、懺悔や讃歎などは皆嘘なり。その中に名聞利養の念混わらざるはなし。念仏するも嘘。時として念仏すら報恩の心より出でず。名聞の虚栄より出ずることあり、恐るべし。

凡夫はすべて嘘。凡夫とは嘘の別名なり。凡夫の心より出ること一つとして真実なるなし。仏はすべて誠。誠は仏の外にあるなし。仏とは誠の別名なり。信仰の要点。嘘の凡夫が、誠の仏に捕えられ打負けたる自覚、是れ信仰なり。

現 在

現在には過去の果を含み、また将来の因を含む。過去を悔ゆるも未だに及ばず。われは現在に於て生活するなり。現在の連続即ちわが生涯なり。現在を除いて更に我あらず。我は現在に於て仏の慈悲を喜ぶのみ。幸不幸、得意失意、何れの時に於ても唯慈悲を喜ぶのみ。われは過去の報いによつて如何なる死様をするか知るべからず。而もわれはその現在に於て仏に救われて直ちに浄土に生るなり。

されば、われは臨終正念を願わず。又、努めて最後を美しくせんと欲せず。かかる事は如何に願うもわが力にては叶わざればなり。唯仏力による。ここに平和あり、安心あり、実にありがたし。

無相法語

岩崎成章

教信同行へ或る人尋ねていわく。「このままで御座りますか」教信曰く「このまゝの御助けと聞いて覚えれば、

では浄土参りはならぬ」とても助かられぬとよく／＼思い知れたが、凡夫の生地（じ）の見えたところで、とありますが、ソコが善導様おゝせの「機の深信」で御廻向の眞信心に照らされて、わが助からぬ、どうあつても助かられぬ生地（じ）の見えたところで「照らされて」「照らされるもの」としての私の生地、自性（じしやう）の見えたところ、見せしめられたところで「照らすもの」眞信心によらざれば、この私の生地、助かられぬ自性は見えないのであります。

「とても助かられぬとよく／＼思い知れたが、凡夫の生地（じ）の見えたところで」とありますが、このところが一番大切なところにて「自性が知れぬとアトで法（ほふ）がくずれる」で、この凡夫の助かられぬ生地（じ）が聴いた、覚えたでなく、ヨッポドハッキリと思ひ知られぬと、わかつたようでも、若存（じやくぞん）若亡（じやくぼう）になつてしまふのですねえ。そこで「それなりで助け

助かられぬ

助かられぬ

助かられぬと思ひ知らさせて

くださるるが御助け

助かられぬと思ひ知らせて下されたら

ただ念仏よりホカはない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

無相師の御実感（一）

無相師は再度の永き入院療養中、その書信に曰く。

「現実生活の上でいろ／＼困ること、いやなこと、病気になること、病苦のはげしいこと、等々によつて自身の業、煩惱の底なしに深きことを痛感せしめられることは御廻向の眞信心の「機の深信」によるといだけ、それに付けても、たゞ念仏せよ、称我名字の仰せよりホカなしと、仰せのまゝにたゞ念仏せしめられることは、これまた御廻向の眞信心による「法の深信」のオカゲゆえと思ひ知らされることあります。御廻向の信心の實際は、実生活上においてはかくの如くこの身に即して体感せしめられると

てやろうとあるお慈悲じや。我が身をかえりみれば、このまゝより外はない」と。

香樹院師曰く、「如来の御思案は、この私が助かられぬ後生と云ふことをき、つけさして下さるなり」と、如来の「御思案」により、見ぬかれ切つた私のスガタが「助かられぬ」ということで、このことを照らし出して、思ひ知らさせて下さるほどの御恩はありませんねえ。ソコで、念仏詩一つ。

助かられぬ

香師おおせに

「如来の御思案は

この私が助かられぬ後生

ということを

ききつけさせて下さるなり」

ああ

今晩は特に思ひ知らされたことでした。

そしてお念仏が毎日、日夜、煩惱のムネに濁悪のクチにたび／＼浮んで下さつて「たゞ念仏」「ただ念仏」ばかりでしたが、その智慧の念仏さまのオカゲにて「お念仏は声の親様である」と体感されるようになって、今までよりグツトこの身に親しくいただけるようになり、まことにありがたいことです。この濁悪のこの身、この心、このクラシと寸時もはなれたまわぬ大悲無倦常照我のお照らし、常照の如来さまが、お声となつてあらわれて下さる——こんなにも親しい、身に近いというより、この身、この心、このクラシに即した如来さまとは今まで体感出来ませんでした。まったくイノチは法のタカラなりで、まことに／＼、「業なり恩なり」であります。

省みて「信心安心」も實際にいくら上手に説いてくれても「教義」では駄目で——アタマだけ、智識的理解だけになつてしまつて——生きた信心、安心のことは結局先徳僧侶の「語録」によるほかなし。歎異抄もまあ唯円房の「語録」といつてよいと思ひます。聖人と唯円房のそれです。

無相師の御実感（二）

大量師のオサトシに

「機と法との二つの実がある。実に死ぬと、実に生きるということ、一往ではわからぬことじや」と。これは機

の眞実は「実に死ぬ」と云うこと、法の眞実は「実に生きる」と云うことである。これには善導様の「前念命終、後念即生」前念にいのちが死ぬ、後念にいのちがいきる、死ぬと生きるは同じこと、説筆次第で前後で云うけれど、一念同時でありましょう。闇がハレルと夜が明けるのと同じように「闇が無くなる」と「明るくなる」とは事實は一つ。自力というか、自己をたのみにする心がつゆちり程もなくなったら本願がたのめる、それでなかったら頼めない、若くは若亡は死にきつていない。凡夫の三業は生死出離についてはまるつきりあかん、とこれが死ぬと云うこと、自力をたのむ心がすたつた。その時他力に生きる、一つで別でない。機の深信が先きにあつて、法の深信が後と云うのではない。機の深信と法の深信は一枚の紙のうらおもて、後先きがない。一枚の紙の表からは、法の深信、裏から云えば機の深信である。これをなんとか手に入れさそうと聖人はされるのではなからうか。結局本人が時節到来して、ああそうかといったかたければ、そばからは出来ぬことであるが、別に凡夫自身の力では「実に死んだり」「実に生きたり」することは出来ぬことで、実に死なしむるも、実に生かしむるも、ひとえに、他力廻向の眞信心のオハタラキによらねば出来ぬことであるから、凡夫が自分の力でそれをしようとしなくても勿論ですね。凡夫は生死出離に

又大量師の仰せに「このままとは悪心だけのこと。信心ばかりは本真物にならねばならぬと思うが、よく聞けば本真物として何があらう。このうそいつわりのゴマノハイぞと聞き開かれたら、一心帰命の外はない」。

香樹院師曰く「そのままのお助けじゃ」と、同行、「このままのお助けですか」曰く「そうじゃない、そのまゝ、だ」と。この場合はそのまゝと云うのとこのまゝとは違う。ある時はこのまゝ、とそのままと同じような使い方をしている場合がある。この場合はどうだろうかと思ふと受取りにくく間違ひをしようと思ふ。この場合のこのまゝとは悪心だけと云うことは、煩惱のうつりかわりから云えば、よい心のおこつてゐる時もそのまゝ、悪い心のおこつてゐる時もこのまゝ、然しこの場合は凡夫の我が身の自性についてこのまゝと云つてゐる。そのまゝのお助けといわれた時のこのまゝは、色々の煩惱のことでなく自分の自性のこのまゝは悪心だけ、外何もない。よく／＼お知らせ頂ければ本真物として私の本性には何もない。よろずのことみなもてそらごとたわごととあることなし。本真物は何もない。

「このいつわりのゴマノハイぞと」自分というものはまことらしいような心の動くときもあれば、色々あるけれど、その本性を押えてみると「うそいつわりのゴマノハイ」悪心以外何もない。信ずるの、任せるの、たのむの、こそば

X④

については全く無能無力だから、出来もしないことをしようとすれば出来ない／＼と悩まねばならなくなり、出来たらしく思つたら自分免許で出来た／＼と思つソレハマチガイ。又等覺寺松野正遵師の「機と法の二つが見えるばかり。すて、とらうとするはハカライじゃ」と仰せられるが、機と法を見るような力は、凡夫にないから、ワレ／＼凡夫の力（反省や内観）で見ようとしても見えはしない。またする力も、とる力もない。それまた他力廻向の眞信心のお力、おはたらきに依るほかないのですから、ワレ／＼凡夫は自分の力で機と法を見ようとか、自力をすて、他力をタノモウとかしないことですね。ただこれはこうだ、アレはアアだとお聞かせいただくのみたいです。

お前は「極重悪人だ」とお聞かせいただいたら「自分ではそれほどわからぬが極重悪人なのだなア」と。「唯称仏」のホカないぞよ、「唯称仏」とお聞かせいただいたら「唯称仏」と頂き、極重悪人唯称仏と、ただスナオにお念仏申させていただく、ナンニモワカラヌ私は、極重悪人唯称仏の仰せのまんまに、唯「ナムアミダブツ」とスナオに申させて頂く、これならいたつてラクですね。そのことがわかつてからもわからなくてもいい、たゞ仰せだけ、お聞かせのまますナオにいただくだけ、ナンマンダブツ／＼の外ありません。

いの、ざんげするの、せんのと云つた処で、チョットも本真物ではない、一時の出来ごとだけのこと。うそいつわりのゴマノハイぞききひらかれたら、そういう自性がはつきり見えたら一心帰命の外はない、ミダをたのむほかはない、ただ念仏より外ないと云うことであらう。だから悪心とか色々いふても煩惱の一つとしての悪心を云う場合と、自性を云う場合とあるから、そこをよく聞きわけ、読みわけんと受取り間違ひ、本當のことが頂けんと思ふ。

吉藏同行の「弥陀は凡夫のウブを受取る、善知識はウブにして渡すが役、私はただ凡夫の性のウブのまゝ、死んで行くのじゃ」とウブとは自性のすがた、機のありのまゝのすがたであり、善知識はありがたい、ありがたい処においておかんと、そのありがたい底はありがたいであらうけれど、ほんまのありがたいというものは、何もないお互いですと云うことを善知識がはつきり知らさんなら役がすまん。ありがたい安心でとどめておいては、ありがたいとか、こそばいとか、求めるとか色々云つても、その底へ入ると皆うそじゃ。殊勝な気がたそうな、仏法的なものは何もない、全く無仏法の自分じゃとはつきり機がすがたを知らせるのが善知識の役割りで、それをそのまま受取るのが如来の役割り。

弥陀は凡夫の生地を受取る、善知識は凡夫を生地にして

渡すが役、この凡夫の私はただ凡夫の性のウブのまま死んでゆく。それで安心して死んでゆく。呼吸が困難になるとありがたいもこそばいも、念仏も何もかもすつ飛んで、ただ苦しい。と凡夫の生地だけになる。その生地のまま死なして貰う、生地のまんまを如来様がお引受け下さる。如来様は凡夫の表面をどうのこうのと云っているのではない、凡夫の生地の助からん、何としても仏法などつゆちり程もないところのうそ。いつわりのそれを、如来様はそれに眼をつけて助けんと思召したちける本願だから、一番大事なことを吉蔵同行が云ってくれていると思う。

庄松が臨終間近かに、同行がよろこんでいるかと思えば、
「よろこびどころか苦しゅうて／＼たまらん」と。それがありがたい。私は、臨終のきわまでありがたく感謝したり、念仏したり、よろこんだりして死ぬのは妙好人にまかせて、私はですよ、凡夫の生地のまんま苦しい／＼で死なして頂くという御縁の方がありがたい、それが私にあう。そう云う風なひどい病苦にあわないで、そこまでの凡夫の生地は全くつゆちり程も仏法気がないと云ことを知る人は至って少ないので、そう云う御縁になか／＼会えぬ。その点大量師の御縁はありがたい。

大悲ものうきことなくて常に我が身を照らすなり、大悲無倦常照我は、何かを御縁にして、全く仏法気のない、全く助かるところのない自分を知らして下さる、それがありがたい。そういう機がすがた、これは大量師が一番はつきり云ってくれている。(以下略す)

池山先生を憶う

？ 唯月

「幸に有縁の知識によらずんばいかでか易行の一門に入ることを得んや」と聖人が仰言ったが、全く智目行足の欠けた身は、よきひとの仰せに導かれるほかはない。茲に先生の四十七回忌を迎えて、御生前恩容慈顔の中から聞かせていただいたことの耳の底に残るものを誌す。

○
ゲエテの「美しい魂の告白」の中に、ある婦人の入信記と私のそれとが形の上でよく似ている所がある。次第に内省の眼の開けた婦人が、最後に隣りに移って来た家庭問題に頭を突込んで、初めはあしらた、こうしたらと相談に乗っていたが解決がつかず、遂にその家の主人を正直であるが意気地のない男と見下げる様になり、更に自分も同じ意気地なしの人間だとまでなった。そして苦しさに堪えず今迄の微温的な信仰は消えて「一度は信仰に入る人の是非経験する、然しそれは極く稀にしか経験されない異常な緊張した心で、ア、信仰が欲しい、と机の上に泣き伏した」

今の処もそうだが「我れ仏恩を知る身となったと思うが早や、我が機を見失うたのじゃ」何が仏恩を本当に知る気なんかありませんか。仏恩報謝と云うても教義の上ではそれでよろしかろうけれど、自分と云うものをおさえ、仏恩を知ったと云う風にたま／＼思うことはあっても、さて本当にお前知っているかと云うことになる、何も知っていない、ケロリとしている、一寸もわかつたらん。

「我れ仏恩を知る身となったと云う本心を、お前ホントかねとおしてみると、信心のハタラクで、更らにその実がない。たまにその心が起ったのは、如来様のお加えの仏智で、御恩を思わして頂くわけで、その下にあるのは固有の迷心じゃ」と、ここが大量師のありがたいところで、ここまでの御縁はめったにない。どこ／＼までも底のない、ナントモナイ「我が機」の迷心を見逃して下されぬ。スグに「この者のお助け」と「お助け」をクサイモノにフタをするような甘い御縁にはついてゆけません。この「我が機」のクササをどこまでも追求して下さる処に大量師のありがたさがあります。この点はとても「教義」では知れぬトコロです。庄松のナントモナイは実に深い永劫に助からぬ我が機を知らして下さる、大量師と共に。この機に到り届いて現われて下さっているのが「今のお念仏」です。この外に我が道はない。

ただ念仏、ただ念仏

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

花田正夫

とある。

私も社会事業に失敗して六高に勤める様になって清閑に恵まれると共に、内省の眼は次第に鋭く開け始めた頃、同僚の数学の教授が「ドイツに留学中思う様な勉強もしないで碌な報告も出せない」と云って苦しんでいた。その人は妙に私の家に来ては苦悶を訴え続けたが、遂に強度の神経衰弱になってクヨ／＼として暮していた。それを見て小さな男だと軽く考えていたが、さて我身を省ると、自分も留学中い、加減の研究しか出来なかつたが、苦しいとも感じないのは随分不真面目な無責任だと気付いて、今度はその人の溜息が私の肺腑を刺すようにこたえた。

其後、四十二歳の頃、愈々深められた内省は生命よりも大切に求めてきた名誉も、それに相当しない自分を知らされ、明日への希望を失って、六帖の部屋に閉じ籠って御飯も録々食べられなくなり、最後の日はもう机の前に坐る力も失って、両手を畳の上について、何処にか信仰がころが

つてはいないかと鋭く部屋中を見廻した。これが「滅多に経験出来ぬ異状な緊張の時」であつた。その時フト心に浮んだのが例の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし」とよき人の仰せ云々」の一句だ。身心共に索きつけられると不思議なもので、親鸞の二字が金色になつて畳の上に大きく映つた。それにグート索き入れられると、その刹那「聖人もそうされたのか、じゃ私も」と心に念じると、次の刹那何のことはない光の滝を浴びた様であつた。その後何分、或は何十分経つたのか知らないが、フト自らの念仏の声に再び自分にかえり「ア、これが信仰か」と自得した。その頃はお客のある時や教室等でつい知らぬ間に高声念仏が飛び出してハツとしたものだった。

○ 先生入信の後、備後の鞆の明円寺に行かれて近角先生を待たれながら「寺はよい、誰に気兼ねもなしに、内から湧くままにお念仏申されるから」と、さも心地よげに念仏されていた。其時の御講話は「廻心といふはただひとたびあるべし」を引用されて御自得を述べられ近角先生を驚喜せしめられたと、――松江岩人師述――。

○ 退職の際の挨拶によく聞くが「当校に参りまして幾年間、幸に大過なしに送りましたことはひとえに云々」と。私な

して貰わなくては其の甲斐がない。折角念仏の風呂が程よい湯加減であるのに充分温まらないで出る人が多い。

○ 如何なる悪人をも積極的に抱いて、どんなにへだてられても、どこまでもへだてずに行くとは出来なくとも、せめて消極的にでも、如何なる悪人をも責められぬと言うような人があるであろうか。

「さるべき業縁のもよほせば如何なる振舞もすべし」とこそ聖人はかねて仰せ候ひきの一句を我身に深く味う人はそうした人である。

○ 先生が六高から甲南高校に招かれて転任された時、「さるべき業縁のもよほせば云々」を引かれて、これで君方とは別れるが、今迄よく信頼してくれたけれど、今後業縁次第ではどうした業さらしをしでかすか知れたものではない。然しそうなつて一切の人から呆れられ捨てられても、聖人だけは御一緒して下さるのだ、と語られた。

その後大谷大学に職を奉じられた頃、藤原あきさんが、主人と子供二人を捨てて歌手の藤原義江氏のもとに走つた時、世間の非難の声が高かつた。その時「あきさんのしたことは悪いけれど、念仏の上からはそれだけでは済まされぬ。自分も同じ業縁に催されるとどんなひどい業さらしを

どにはあれはどう間違つても言えない、考えても見たまへ一日の生活だって冷汗ものだよ。

○ 六高の講堂に「不恥^{ハズカシ}」と言う額がある。然し寢床に入つて独り次から次へと連想するよしなし事など、他人に言えたものではない。あれは一度も自己を凝視したことのない人でなければ書けない。

○ 無碍と云うのは、碍りがなくなつてしまふのではない。身に持つ業の限り障りはひっきりなしに続く。その碍りがあるましまさわりがさわりとならなくさせて貰うのだ。

○ たのまるる。ただ念仏の我にあり、さるべき業はさもあらばあれ

○ 煩惱をのけにした念仏は、便所のない別荘だ。どんな立派な座敷でも便所がなくつちあ住めない。煩惱あつての念仏でこそ、煩惱具足の我々の安住所である。

○ 或夏の昼、氷を運ぶ車から、溶け水のしたたるのを見られて、あのように煩惱の氷がとけて念仏が出るのだねと。

○ 念仏の風呂はスツブリと充分に温まつて、心の垢を洗除

するか知れたものでないね」と念仏裡に独語された。

○ 「今親に会つて来たばかりです」と云つた風な、満ち足りたいき／＼とした顔には仲々あえぬものだ。何処でも俺が／＼が鼻についた寒々とした顔ばかりだ。

○ 同僚間で朝顔をあわせても調子のよい時は「おはよう」と何のこだわりもなく云えるが、そうでないと、こちらが虚心に挨拶しても、向うでそっぽをむかれることもある。すると持つて生れた自負心が頭を上げて、こちらもへだて心になり、鼻と鼻との突き合いが始まる。

○ さてこうした時、聖人を思い浮べると全く恐れ入つてしまふ。こちらがどんなに鼻を高くしてむかつてても、虚心に受け取つていただけの人だから。

○ 始終繰り返す私の経験では、何か問題にぶつかつて心が闇くなつたと思う矢先、程なく何かのキツカケで、遠くで灯台の光を見る様に、心の中に一縷の光が射して来ると漸次明るい世界に出される。これは「わろからんにつけてもいよ／＼願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱のころもいでくべし」と味わされる。

○ 市丸か勝太郎が美声で歌うと情趣深いのだが、伊那節に、

天龍下ればしぶきが、かゝる

かけてやりたや

かけてやりたや、檜傘

と云うのがある。伊那の山奥の子が学校を卒えて社会に出ようとして、風呂敷包みを持って筏に乗って旅立って行く。それを見送る母親がその姿が消えるまでじつと見まもる心が偲ばれる。

○ 六高時代から煙草と囲碁の番付を作ると大抵東か西かの横綱格にされたものだが、最近二ヶ月程煙草をやめている。然し別に自分からやめようとはからし思ったこともないのだが、先年大病して以来毎日の私の喫煙量が僅かでも減っていると家族の者が喜び、すこしでも多いと愁わしげな顔をしているのに気づいて、自分一人のために、あゝまで心配しているのかと思うと、それがいじらしくなって、丁度祖父さんが孫のくれる菓子でも食べる様な気持で、みんなの好意を受け容れたら何の苦もなしにやめられた。念仏を聞くにもこの骨が役立つと思う。よき人の仰せ、「ただ念仏して」を「私一人を案じて下さって、あゝまでお勧め下さるのだ」と向う様の心をお受けして、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とこうお称えすることが大切だ。

○ けに寝ころぶのは稀で、何時でも立ち上れる様にしているものですが、其日は「日和はよし、主人は側にいる、だから何が来ようと安心」となったのでしよう。

○ 仰向けに 仔犬ころぶ日向かな

と誦し、念仏信者の心にかようと大きく首肯かされた。

○ 猫はさ程にないが、犬は元来大好きです。或日動物園に行くと、小牛ぐらゐの犍猛な奴が、柵の中でうずくまっていた。誰が呼んでも見向きもせずと云う風態をしていた。そこで私が近寄って、

「おい大将！」と呼びかけると、のそり／＼と起きて来て「何だ、お前さんかい」と云った顔付でこちらをのぞいた。これは私の大好きな心が犬に感入したのだ。信仰はまた感入だ。久遠このかた子故の廻向が、私共に感入された時「親鸞一人がためなりけり」となるのだ。

○ 大病中から静養後まで、例の「ただ念仏」一つになりきっていたと云うのか、あらゆる問題が片っ端からテキパキと片付けられてさ程煩惱にわずらはされることもなくて、何とも云えぬ法悦の生活を続けていたが、何処やらに物足りない、足が地に浮いた様な気持で、妙だなあと思っていた。

或真面目な求道者が、「長年信仰問題は心にかけていますが、どうも如来が解りません、どうしたらよろしいでしょうか」

とお尋ねすると、

「私共の持ち合せの智慧では浄土の莊嚴も、法蔵菩薩の御苦勞も神話にしか思えません。いくら巧妙な説明を聞いても、そうですが関の山です。ただ念仏なさい、こうした者のためにとおうけして。すると自然に自得されるでしょう」と。

○ 奈良に遊ぶと、道々に沢山の宿引が声をかける。

「如何でしょう、手前の宿は静かな座敷が」

「如何でしょう、湯にでも入られては」

等々であるが文無し者には夫等の声をあとにして過ぎる外はない。

○ 世界にも無数の教があつて実に引く手数多の感に堪えないだが曾無一善の私共にはどの宿も安住所ではない。唯然しこの文無しを承知の上で、何処までもつきまとうて、何の要求もなしに引き入れて頂くこそ真実の教である。

○ 小春日の或日、日向に椅子を出して新聞を読んでいると仔犬が側に来て、仰向けに寝ころんでいた。元来犬は仰向

其後大学に自動車で通えるようになって、廊下を歩みながら、心中を再びしらべて見ると、チャンと煩惱の数々が据えている。それを見出してからガツシリと足が地についた心地がした。歎異抄九条の「煩惱の無きやらんとかへりてあやし／＼候ひなまし」が初めてピツタリと味えた。

○ 「弥陀のおんもよほしにあづかりて念仏申す人」と云い「総て往生には賢き思ひを具せずして、ただほれ／＼と如来の御恩の深重なることを思い出しまゐらせば念仏も申され候、わがはからはぬを自然とは申すなり云々」とある。念仏も申され候、申し候ではなく、申され候とは何とも云えぬお言葉だ。

○ 耳を立つればなつかしや、あなたこなたの木陰に鳴く音をもらすほとぎす

と云う歌があるが、宇治はその名所であるから、そこで聞き耳たてると聞けるだろう。私はまだ聞いたことがないが、歎異抄の山に分け入ると、随所に如来の喚び声が聞こえる。歎異抄はその名所である。

『呼子鳥』より抄出。

あとがき

師走のつめたい風が老人には身にしむことで、皆様の御無事を祈念申しております。

慈光誌も三十七年を迎えようとしております。近角、池山の両先生をはじめ、西元、井上の両先生の御原稿をいただき、又正月に亡くなられた木村無相師と岩崎成章様の聞き書きによって、信徳を掲げていただきました。私は無相さんと同年の傘年、釈尊と法然聖人と同じ年齢となり、感無量なものがあります。余命を大切にさせていただき、慈光を通じて御信交を蒙りたいと願っております。

蓮如上人の御一代聞書に、「無益の歳末の礼かな、信心をいただいて礼とせよ」と申されたことを例年のことながら思い出されて襟を正させられます。私が二十四の秋、始めて仏の大悲を知らされ、喜びのあまり父の墓前にお礼参りをしました時、私の念仏に導かれて行くことに父も満足してくれると知らされ、蓮師のお言葉も素直にいただけるようになりました。

次で執筆下さっている先生方の御住所を誌させていただきます。

西元宗助先生、京都市左京区下鴨蓼倉町六八
榊原徳草先生、京都市西京区山田開町 浄住寺
井上善右エ門先生、

神戸市灘区篠原北町三一九―二七
岩崎成章先生、川崎市川崎区旭町一―一四―一三

○
なお池山先生の御著者は、京都の榊原徳草先生か、慈光社に御申込み下さればお送りいたします。

又、名古屋の一道会例会は、毎月慈光社の南隣の鬼頭康彦氏のお宅で、第三日曜の午後一時半から催しております。有縁の方々の御参会をお待ちしております。但し私の病状で休ませて頂きますが、その度に本誌に記入いたします。一期一会、いのちなりけり佐渡の中山、を想起してお念仏させて頂いております。

定価 半年 八〇円(送共) 印刷人

一年 一六〇円(送共)

坂部光雄
名古屋南区駈上二丁目五十六

編集・発行人 花田正夫
発行所

慈光社

電話 八二局七〇三七番

振替口座 名古屋 六二四七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

郵便番号 四 五 七